

と思われる。four vessel study の重要性を強調し、本動脈瘤の解剖学的位置関係、手術手技について報告した。

5) 延髄神経膠腫の手術例

高浜 秀俊・佐藤 和彦 (山形大学)
山田 潔忠・中井 昂 (脳神経外科)

延髄に原発した astrocytoma の手術例をビデオで供覧した。

症例は48歳の男性で、1987年3月歩行障害嚔下障害・嘔声を主訴に来院。神経学的には注視方向性眼振・水平性滑動性眼球運動障害・右顔の発汗増加・嚔下障害・右軟口蓋麻痺・右咽頭反射の低下・嘔声・右声帯麻痺・舌の右への偏位・起立性低血圧・右に倒れ易い歩行障害等を認め、延髄の右側に主座を有する髓内腫瘍を疑ったが、CT では異常は指摘できなかった。MRI の T₂ 強調画像では、延髄は全体が腫大し High intensity を呈していたが、Gd-DTPA により造強されなかった。椎骨動脈写では、両側の後下小脳動脈の外側への圧排所見を認めるのみで、tumor stain は認められなかった。1987年4月生検を行った。病理組織学的診断は pilocytic astrocytoma であった。手術後、局所に 30Gy の照射を行い、外来で経過観察していたところ、1988年9月頃より歩行障害が、11月より嚔下障害が徐々に進行し、1989年1月になるとしばしば転倒するようになり3月再入院となる。

延髄背面の腫瘍の一部は、単純 CT で Low density を呈し、造影 CT で enhance された。MRI でも、同部位は T₁ 強調画像で Low intensity, T₂ 強調画像で、High intensity を呈し、Gd-DTPA により造強された。血管写の所見は前回と変わらなかった。

術中モニターとして呼吸を用いたかったが bucking がこわく、筋弛緩剤を使用し全麻下に、corticospinal D-response をモニターして行った。腫瘍のおよそ70%を摘出した。術直後より自発呼吸はみられたが換気は十分でなく、術後8週間程 assist を要した。術後管理を含めて報告した。

第14回リバーカンファレンス総会

日 時 平成元年12月2日(土)

午後1時30分

会 場 日本歯科大学新潟歯学部 講堂

一 般 演 題

1) 本院職員に対する B 型肝炎ワクチン接種状況と効果の検討

川村 正・小池 雅彦
広瀬 慎一・遠藤 次彦 (長岡赤十字病院)
荒井 奥弘 (消化器内科)

1987年1月から本年10月まで本院職員および看護学生 630人(女 521, 男 109) に対して接種した HB ワクチンの効果について検討した。HBs 抗体陽性率は、女 86.0%, 男 67.0% 全体で 82.7% であった。各年代層とも女が男より 15~25% 効率であった。陽転者の 1, 2年後の抗体価の推移は、1年で 22%, 2年で 43.3% が低下し、陰性化は 1年で 5.4%, 2年で 17.0% に認めた。ワクチン接種後なお HBs 抗体陰性者並びに低抗体価陽性者 67人に 4 回目の接種をした結果、陰性者の 45.7% が陽性化し、低抗体価陽性者の 95.2% が 10倍 (RIA, COI) 以上に上昇した。630人、1960回のワクチン接種を通じて大きな副作用はなかったが、6人(0.95%) に軽度のトランスアミナーゼ上昇が一過性に出現した。

2) 当院における HB ワクチン投与と自然抗体陽性化についての検討

吉田 俊明・鈴木 健司
村山 久夫 (信楽園病院内科)

【目的】当院における自然 HBs 抗体陽性化と HB ワクチン接種後の反応性について、年 6 回の職員定期検査成績をもとに解析した。【方法】血漿由来 HB ワクチンを各 20 μ g を 3 回接種し、血中 HBs 抗体価を測定した。当院就職時 HBs 抗原陰性、HBs 抗体陰性の職員を対象に自然 HBs 抗体獲得までの期間を観察した。観察期間は就職時から ① HBs 抗体獲得時、② HBs 抗体陰性最終確認時、または ③ HB ワクチン接種時までとした。① を自然陽転例、②③ を陰性例として検定した。【結果】HBs 抗体自然陽転例は 276 例中 57 例 (21%) であり、その多くは一過性陽性を示した。看護婦(士)の累積 50% 陽性期間は 8.2 年であった。ワクチンの初回接種を 253 例に施行した。抗体獲得率は 85% であり、その抗体価には著しい個体差を認めた。